

はじめに

リウマチ膠原病の症状は非常に多岐にわたります。そのため、多くの臨床医の先生方や医学生さんたちは、「膠原病って何だか難しそう…」とのイメージをおもちかもしれません。でも、リウマチ膠原病を専門とする医師にとっては、少し印象が異なります。リウマチ膠原病学は、一定のパターンさえ身につけてしまえば、そこからすらすらと診断を導くことができ、勉強すればするほど世界が広がっていくのです。そのうちにあなたもきっとこう思うようになるでしょう。「こんなにおもしろい学問はない！」と。

リウマチ膠原病の専門医は決して、個々の疾患の診断基準を読み上げて、これが当てはまる、当てはまらない、と判断しているわけではありません。「主要徴候」からスタートし、そこからいくつかの疾患に共通するパターンをもとに、自分なりの鑑別診断の系統樹をつくり上げ、診断を絞り込んでいるのです。例えば「関節の腫れ」ひとつをとり上げたとしても、その腫れ方は疾患群により微妙に異なっています。それを意識して観察をくり返すことにより、主要徴候からいわば反射的に鑑別診断をあげられるようになるのです。本書は、そんなリウマチ専門医の頭のなかを、1冊の本にまとめたものです。

この「主要徴候からアプローチする」という考え方は、本邦でも総合診療はじめあらゆる分野の診断学で行われていることではありますが、とりわけ、欧米の内科学のレジデントが徹底的に叩き込まれる考え方です。この考え方を軸とした教科書を作成するために、本書では最適な共著者である神野定男先生とタッグを組むことになりました。神野先生は、米国で10年間にわたり Rheumatology の専門医として診療に携わり、それを実践してこられました。一方、私は、海外で学んだわけではありませんが、三森経世先生をはじめとする本邦の膠原病学の権威の先生方から、リウマチ学を学んできたという自負があります。こうして、日米のリウマチ専門医が火花を散らしあいながらつくったこの本を、ぜひご覧いただければと思います。

また、本書ではもう1つの特徴として「なぜそうなるのか？」を考えることにも重きをおきました。例えば、皆さんは、医学部の講義で「リウマチは骨を食む、SLEは骨をかすめる」という説明を受けたことがあるかもしれません（関節リウマチでは骨破壊をきたすが、SLEの関節炎では骨破壊をきたさないことの例え）。以

前の教科書では、ただそうなのとの記述にとどまると思いますが、現代のリウマチ膠原病学や免疫学の進歩を踏まえれば、「なぜそうなるのか？」を理論的に説明することが可能になっています。この本を通じて、近年のリウマチ膠原病学の華々しい進歩を、肌で感じていただければと思います。

最後に、本書の作成にあたり、珠玉のような写真をご提供いただきましたすべての先生方に御礼を申し上げます。特に大阪公立大学整形外科の岡野匡志先生と皮膚科の鶴田大輔先生、廣保 翔先生からは、数多くの写真をご提供・ご監修いただきました。当科スタッフや研修医からも幅広く意見をいただくことができ、皆様のおかげで「膠原病学がカラフルで楽しい学問である」ことを伝えられる本になったと思います。

本書を手にとっていただいた先生が、一人でも、リウマチ膠原病学に魅力を感じていただき、この不思議な世界の探検に一緒に加わっていただけるならば、筆者にとってこれ以上の喜びはありません。

2024年9月

大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学
橋本 求

執筆協力者

岡野匡志	大阪公立大学大学院医学研究科 高齢者運動器変性疾患制御講座 特任教授
鶴田大輔	大阪公立大学大学院医学研究科 皮膚病態学 教授
廣保 翔	大阪公立大学大学院医学研究科 皮膚病態学 講師
楠原仙太郎	神戸大学大学院医学研究科外科系講座 眼科学分野 講師
山田真介	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 准教授
渡部 龍	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 講師
福本一夫	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 講師
勝島將夫	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 病院講師
藤澤雄平	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 病院講師
野口貴志	京都大学大学院医学研究科 整形外科学 助教
石原龍平	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 大学院生
桑本智弘	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 後期研修医
富樫 救	大阪公立大学大学院医学研究科 膠原病内科学 後期研修医